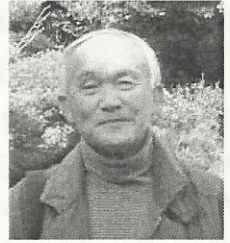


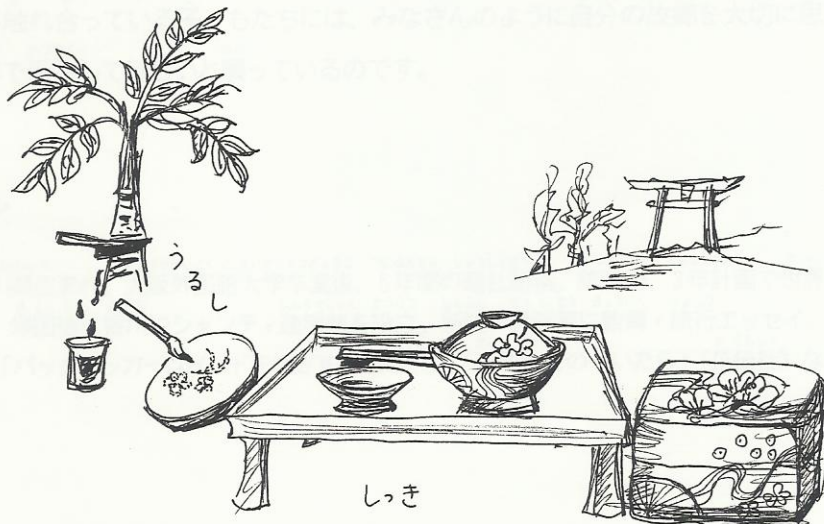
しっ き 漆器 (japan)



もと こうこうこうちょう
元・高校校長
くすみ しゅうぞう
楠見 修三

①日本独特の産物

世界共通に食品を盛りつける食器にはいろいろな材質を使いますが、なかでも一番多いのが陶器・磁器、ガラスや金属がありますが、日本では、そのほかに木製の食器をたくさん使っていますが、そのほとんどが漆器です。英語では、磁器を china と呼ぶのに対して漆器を japan と呼ばれるように、日本独特の産物の漆器の最大の特色は、木が熱の不良導体で中のものがさめにくく、さらにふたがあれば、いっそう熱の拡散が防げます。さめにくいということは、漆自体ではなく、木の特質ですが、木はきじ生地だけでは汚れやすく、割れやすいので、漆を塗ることによって、その欠点を補っているのです。漆は、木質を保護し、同時に、独特の美しさもつくりだすために、かわかしては塗り、かわかしては塗るという作業を繰り返します。大変な手間をかければかけるほど、木はめったなことでは割れません。また、何度も塗り重ねをする漆器ですから、その上に絵や模様を描くのは自由にできますので、金・銀などで模様をつけた装飾性の強い食器がつけられ、平安時代以来、日本人の食卓をかざってきました。この漆器の影響が、陶器にもおよんでいき、陶器の上に模様や図案をいろいろな色で塗りあげ、九谷、赤絵伊万里といわれる、非常にきれいな着物の図案のような装飾陶器をつくりました。



なお漆は、九千年前にはすでに鍍などを固定する接着剤として使われ、また、うつわとしても縄文時代には使用されていました。飛鳥・奈良時代、大寺院の造営にともない仏像や仏具、調度などを塗る精巧な漆工技術が広まってきわめて芸術的格調の高い漆工芸品が数多くつくりだされました。また、京都の金閣寺の建物へ金箔を貼るにあたって下地に漆を塗り重ね、その上に金箔を貼っています。それらの技法は、今日まで日本の漆工芸の伝統の源となっています。

②南蛮漆器

16世紀には西洋人好みにデザインされた「南蛮漆器」と呼ばれる漆器が、キリスト教宣教師を通じてポルトガルに輸出され、江戸時代に入ると、長崎の出島からは、多くは出島の商館長達の脇荷として、漆黒に透明感を持った艶のある肌に金銀の蒔絵や螺鈿で装飾された洋櫃などの調度や家具がオランダ経由で大量にヨーロッパに輸出されました。

③漆

漆には、温度や湿度、漆に含まれるそのほかの成分の量加減で、乾く時間を調整することができる特性があります。また、非常に敏感で少しの塵や不純物がついてもその部分が均質には乾かない性質を持っています。そして最大の特徴は、一旦乾くと、酸、塩、アルカリや電気にもびくともしない強さにあります。漆器は、このような特性を持つ塗料であり接着剤である漆を使って、木・樹皮・竹・布・紙・金属・陶磁・皮革などの様々な素地を器胎として作られます。

伝統文化の一例を紹介しましたが、文化を理解・体験することがその国の真の姿を過去・現在・未来にわたって見ることが出来るものと考えます。漆器を手にとって感触を楽しんで下さい。最後に現在の代表的な漆器を紹介します。京漆器、輪島塗、飛騨春慶、紀州漆器、会津塗、山中塗などです。

漆器の楠見先生の経歴

和歌山市出身

大阪府立高等学校社会科日本史担当

大阪府立日根野高等学校長、大阪府立弥生文化博物館（教育専門員）をへて

現在 和歌山市語りクラブ員（ボランティア）

趣味 史跡訪問